

高学歴中国朝鮮族の移動 —先を見つめる子育てとハイブリッド・アイデンティティー—

Highly Educated Korean Chinese Living Overseas: Their Strategic Language Education and Hybrid Identity

趙貴花*
Guihua ZHAO

Abstract

In this paper I investigate the current situation of how highly educated Korean Chinese move between three countries, Japan, China, and Korea, especially paying attention to those who currently reside in Japan. I also consider how their self identities are established and how they should give their children language education at home.

Recently, young Korean Chinese, who have a chance to learn Chinese, Korean, and Japanese in Korean Chinese School (Chaoxianzu Xuexiao) in China, freely move in the East Asian region, in order to acquire higher education and get a better job, sometimes with the aim of reuniting with their parents and relatives. They feel this region forms a living sphere across the national border.

Meanwhile, highly educated Korean Chinese regard language as a part of human capital, and strategically try to hand over this "language capital" to their children in a long-run perspective, in order for them to survive in a tough competitive society. They often teach their children Chinese or Korean, which are not taught in Japanese school.

Their multilingual ability and cross-border mobility within this region also give a great influence on the formation of their self identities. While they move freely across the border, they develop a subjective way of thinking to cultivate a hybrid self identity on a cultural basis beyond political and historical conflicts. They also expect their children to establish such a hybrid self identity with a great diversity and flexibility. In that sense, strategic language education can be regarded as a means to realize it.

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター特別研究員、Assistant Research Fellow, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
E-mail: chokika@ej.s.seikei.ac.jp

**謝辞：この論文は、昨年成蹊大学アジア太平洋研究センター主催の連続講演会『グローバル化時代の人の移動とアイデンティティ：若年層に着目して』（全3回）の第1回「アジアにおける留学生の移動と教育」で報告した内容を基に執筆したものである。執筆にあたっては、東京大学の白石さや教授から丁寧な指導を受けた。また、成蹊大学の川村陶子准教授から貴重なコメントと激励をいただいた。そして、成蹊大学アジア太平洋研究センターの中神康博所長から論文の書き方についてアドバイスをいただいた。これらの先生方に、この場を借りて深くお礼申し上げたい。

I. はじめに**

グローバル化の進展と世界的な高度人材獲得競争の激しい中、近年の新しい動向として留学や就職による高学歴者の国際移動が増えつつある。本稿では、中国の朝鮮族というエスニック・グループの国際移動に注目し、留学や就職で日本に移動した高学歴朝鮮族の事例をもとに、彼らの日中韓3国におけるダイナミックな移動の実態と家庭における子どもへの言語教育戦略および彼ら自身の新しいアイデンティティの創造について考察する。現在、アジアの豊かな専門職人材の動向が世界的な注目を集めているが、東アジアから最も多くの「高学歴移民」を送り出しているのが中国で、その数は120万人に及ぶ（アベラ 2009: 14）。中国の中でも、日中韓3国の間を活発に移動しているのが中国朝鮮族である。

中国では1978年に改革開放政策が実施され、国家や各政府機関からの公費派遣の留学政策が主として推進された。私費留学を奨励する政策は1981年に打ち出され、1984年には中国政府により「自費出国留学に関する暫定規定」が公布されることで、私費留学が全面的に解禁された（坪井 2007: 155）。日本法務省の人口統計データによれば、2010年現在日本における外国人数は約213万4,151人であり、その中で人数が最も多いのが中国人で、約68万7,156人とされている¹。その「中国人」と登録されている人びとの中には、中国の漢族だけでなくさまざまな少数民族も含まれるが、日本政府による統計データでは彼らの総称として「中国人」と記載されているため、民族別に人数を分けることは難しい。本研究の調査対象である日本在住の中国朝鮮族は、人数の把握は難しいが、約6～7万人に推定され、首都圏には約4～5万人が滞在していると見られる²。朝鮮族の日本への移動は1980年代の大学教員の海外研修による移動から始まったと見られ、1990年代以降は企業研修や留学による移動が増え始めた。

朝鮮族の人びとは、これまで中国の東北部（黒竜江省、吉林省、遼寧省）に主に住んでおり、中国の地にあってもエスニック・アイデンティティを強固に保ってきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である中国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を平行して教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきた。中国政府による公教育機関での二言語教育によって、朝鮮族の人びとは中国人としての国民的帰属意識と朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティの両方を相互にバランスをとりながら維持してきたと考えられる（趙 2008: 177-187）。朝鮮族の3～4世の若い人たちは、朝鮮族学校において中国語と朝鮮語だけでなく、外国語として日本語あるいは英語も習得することができた。こうした多言語能力によって、彼らの東アジアにおける交流の最前線で活躍する機会が飛躍的に増加している。1990年代以降、中国の改革開放と市場化の中で、朝鮮族の人びとは中国内はもとより、韓国、ロシア、日本、北朝鮮、アメリカなどへと活躍の場を広げている。それでは、このような多言語能力を有し、活発な国際移動を行う朝鮮族の人びとのアイデンティティはどのように変化しているのだろうか。そして、彼らは自分の子どもにはどんな言語を習得させようとしているのだろうか。本稿では、これらの点について検討していく。

朝鮮族の海外への移動と移動先での長年の滞在とともに、彼らの中にはすでに移動先の国籍を取得した者もいる。本稿では中国の戸籍に「朝鮮族」と登録されている者だけでなく、海外へ移動し、移動先の国籍を取得したとしても、自ら「朝鮮族」と主張する者は「朝鮮族」と呼ぶ。

¹（日本）法務省登録外国人統計 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html（アクセス：2012年7月5日）

²『東洋経済日報』2010年「＜オピニオン＞韓国経済講座 第120回」8月13日 http://www.toyo-keizai.co.jp/news/opinion/2010/post_4078.php（アクセス：2012年7月5日）

³ Ibid.

なお、本稿で用いる「高学歴者」という用語は、高等教育を受けた者を指し、主に出身国や移動先の国の高等教育機関で教育を受けることで学士や修士、博士の学位を授与された者を指す。本稿で用いる「言語教育戦略」とは、親が一定の目標をもち、子どもに一つあるいは複数の言語を習得させるために、意識的および計画的に行う教育的行為を指すものである。

筆者は2010年1月から2012年9月の間に、東京、名古屋、京都、大阪などの都市においてフィールドワークを行った。主に朝鮮族がよく集まる街や飲食店などで参与観察し、朝鮮族の家庭を訪問し、彼らが使用する言語や居住環境および地域特性などを多角的に観察した。そして、本調査では約23名の20代前半から50代前半の朝鮮族の男女に対してインタビューを行ったが、本稿ではその中で代表的な事例を引用しながら論述する。

以上のことから、本稿ではまず朝鮮族の日中韓3国における移動の実態を明らかにし、その次に高学歴朝鮮族の子どもへの言語教育のさまざまな形について分析し、最後に移動する朝鮮族自身のハイブリッド・アイデンティティの構築について考察する。

II. 日中韓3国を一つの生活圏とする朝鮮族

日中韓3国は、地理的に近接し、歴史的、文化的に関係が深く、近年経済的な相互依存関係が深まる中、その域内の人の移動がかつてないほど活発化している。その中でも、この3国の域内において積極的に移動を行っている人たちがいるが、彼らは日本在住の朝鮮族である。

中国から日本に移動してきた朝鮮族の背景には、彼らの多くが中国の中等教育において外国語として日本語を習得したことが一つの要因になる。中国東北部の朝鮮族学校では中学1年から高校3年までのカリキュラムの中で、これまで日本語を外国語として設置することが多かった。それは主に歴史の中で中国の東北部が旧満州地域として日本語の影響を受けていたことと、日本語が朝鮮族の使用する朝鮮語と発音や文法などにおいて類似点が多いことから、朝鮮族に習得しやすい言語として認識されていたことが要因として考えられる。

以下では、日本在住の3人の朝鮮族の事例を通じて、彼らの日中韓3国における移動の実態を明らかにする。

1. 留学・就職を主とする移動

現在日本に住んでいる朝鮮族の人びとは、1990年代以降に留学で来日した朝鮮族がその主流を占める。彼らは主に20代前半から30代前半の間に留学を行った朝鮮族3～4世の人たちである。彼らの中には、日本で学業を終えた後中国に帰る者もいれば、就職などで日本に滞在し続ける者もいる。さらに、留学や就職などを目的にアメリカや韓国などの国へ移動する者もいる。

＜事例1＞ 朴志桓（仮名）、男性、30代、朝鮮族、中国で学士号、韓国で修士号、日本で博士号取得、専門職。

朴さんは中国東北部のある朝鮮族の集住する村で生まれ育った。この村には約1000世帯の朝鮮族が集住していたため、朴さんは幼い頃から日常において朝鮮語のみ使用し、中国語を使わなくても不便はなかった。小学校から高校まで朴さんは地元の朝鮮族学校に通い、大学受験の時は優秀な成績で中国内のある名門大学に進学した。大学卒業後、偶然、知り合いを通じて韓国の大学のある教員と連絡をとるようになり、それをきっかけに韓国への留学を決意した。朴さんが韓国へ行くことを決めたことには、

学業以外にも「母国に一度住んでみたいし、韓国の人や韓国の文化についてももっと知りたかった」という理由もあった。朴さんは韓国の大学で修士課程の勉強をする一方、博士課程への進学を目指していた。自分の専門分野では日本で行われている研究が中国や韓国より優れていることに気づいた朴さんは、日本への留学を準備した。日本にいる昔の大学の先輩から指導教員を紹介してもらい、2002年に日本に留学した。来日した後は、奨学金を得ながら博士課程での勉学・研究を通じて、無事に博士号を取得した。その後、帰国する予定だったが、日本で仕事が見つかることで、朴さんは引き続き日本に滞在することを決意した。

朴さんは、自分が国際移動を行うことには、学業以外にも「若いうちに、いろいろな文化を体験したい」ということが一つの理由でもあるという。彼は現在、毎年仕事や親族の訪問などで、日本と中国そして韓国の間を行き来している。今後について、「仕事によって、さらに国際移動を行う可能性がある」と語った。

＜事例2＞ 呉文成(仮名)、男性、30代、朝鮮族、中国で学士号、日本で修士号と博士号取得、専門職。

呉さんは、中国東北部のある朝鮮族の集住する町で生まれ、高校の時までそこで育った。小学校から地元の朝鮮族学校に通い、成績が優秀で飛び級をした経験もある。大学受験の時は北京の名門大学に進学し、卒業後は北京で就職した。呉さんは中等教育で日本語を習ったが、仕事をする中で、業務上日本語の能力をさらに高める必要があることを意識し、友人の助言を得て日本へ留学した。呉さんは2000年来日し、日本語を習得したらすぐ帰国する予定だったが、日本の大学で修士課程、博士課程を経て博士号も取得した。中国で就職することを考えていた呉さんは、ある日、韓国のある大学から来た一本の電話で韓国への就職を決めた。この決断について、呉さんは「韓国を選んだというよりは、(韓国の)大学を選んだと言える。その大学の知名度や研究環境、そしていろんな可能性と機会を考えて決意した」と語る。

けれども、呉さんにとって韓国はまた特別な地でもあった。彼は朝鮮族3世で、韓国は祖父母の生まれた故郷でもある。約10年前から呉さんは年に一回ほど韓国に行き、祖父母の故郷である慶尚北道に足を運んだりする。そこにはすでに親戚も見つからないが、呉さんは祖父母の戸籍を確認し、祖父母の生まれた地で現地の生活を体験することで、先祖の歴史を辿り、自分のルーツを確認しようとしている。呉さんの両親と兄弟は中国に住んでいるため、呉さんは定期的に中国にも帰る。呉さんは、韓国の大学に就職したが、必ずしもずっと韓国に住む考えはなく、仕事の必要によってさらに国際移動を行なう可能性があるという。

上記の二つの事例から、朝鮮族の若い人たちの中には留学や就職などで日中韓3国の間を移動していることが分かる。けれども、この三つの国において高等教育の各段階を経てきた朴さんや中国と日本で高等教育を受け、さらに韓国の高等教育機関で就職する呉さんのようなケースは、必ずしも朝鮮族の中で一般的に見られる現象ではない。それは彼らのような一部の高学歴エリートによく見られることである。けれども、さまざまな目的で中国から日本へ移動し、親戚訪問や結婚およびビジネスなどの目的で、さらに日本から韓国へ移動する朝鮮族もいる。

上記の事例に見られる共通点は、より良い教育とより良い仕事の環境などを求めて国際移動を行なうことである。そして、移動先を国で選ぶのではなく、本人と直接関連がある大学など、

より小さな単位で考えることが明らかである。そして、朴さんと呉さんとも国際移動を行なう際に、友人や知人のネットワークを活用していることも観察できる。

また、朴さんと呉さんの日中韓3国における移動は、単に勉強や仕事のための移動に限るものではない。中国で朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティをもち、朝鮮族学校に通った彼らにとって、韓国は「祖父母の故郷」として常に心の中に描かれていた。そうした先祖への記憶と故国への想像が、彼らの韓国への移動を促している。そして、朴さんと呉さんとも中等教育で中国語と朝鮮語以外にも外国語として日本語を学んだことが、彼らの日本への移動を促進した一つの潜在的な要素としても考えられるだろう。さらに、朴さんの「若いうちに、いろいろな文化を体験したい」という考えは、ほかの若い朝鮮族にもよく見られるが、これは国際移動を行なう朝鮮族の人びとがより良い教育環境や労働環境を求めているだけでないことを示している。

朝鮮族の若い人たちは、すでに中国内だけでなく、より広い外の世界に目を向け、活躍の範囲を広げつつある。彼らはこうした国際移動の中で、自分が誰なのか、どんな言語を学ばなければならないのかを意識し始める。さらに、彼らは子どもにはどんなアイデンティティを構築させ、どんな言語を学ばせ、どんな教育を受けさせるのかを考えるようになった。

2. 両親の滞在地が「帰る場所」となる移動

日本に滞在している朝鮮族の家族や親戚の人びとは、中国だけでなく、韓国にも多く居住している。それは、中国東北部に集住していた朝鮮族が、1992年の中韓国交正常化とともに、親戚訪問や出稼ぎ、結婚および留学などを目的に韓国に移動し、現地で長期滞在する人が増えてきたからである。2012年7月31日の韓国法務部の統計によれば、韓国在住の韓国系中国人（筆者注：中国朝鮮族を指す）は約46万7,981人とされている⁴。

日本に留学している朝鮮族の中には、留学費用の多くを韓国で働いている両親の仕送りに頼る者もいる。そして、日本の朝鮮族の中には、正月や休暇の時に両親や親戚がいる韓国に移動し、そこで休暇を過ごす者も少なくない。結婚を迎える朝鮮族の若いカップルたちは、両親や親戚が多い韓国で結婚式を挙げることも一般的である。筆者が会った日本在住のある30代の朝鮮族女性は、4年前に韓国で結婚式を挙げた。韓国には、彼女の両親だけでなく、親戚も約30名住んでいる。その親戚のほとんどは中国から出稼ぎで韓国に移動し、その中にはすでに韓国の国籍を取得した者もいるという。

留学で日本にきた朝鮮族の中には、勉強を終えた後に日本で就職する者が少なくないが、女性の場合には卒業直後に会社に就職しても、結婚・出産した後は仕事への復帰あるいは再就職が難しくなることが多い。仕事を続けようとする女性の場合には、中国や韓国にいる両親に子育てを支援してもらうことも珍しくない。その場合には、両親が日本に来て短期滞在（3カ月～6カ月）する場合もあれば、子どもを中国や韓国にいる両親に預ける場合もある。そして、下記の事例のように、両親に子どもを預けることができないが、子どもを連れて両親のところに定期的に「里帰り」する場合もある。

＜事例3＞ 金美玲（仮名）、女性、30代、朝鮮族、主婦、中国で学士号、日本で修士号取得。

⁴（韓国）出入国・外国人政策本部ホームページ

http://www.immigration.go.kr/HP/COM/bbs_003/ListShowData.do?strNbodCd=noti0097&strWrtNo=100&strAnsNo=A&strOrgGbnCd=104000&strRtnURL=IMM_6070&strAllOrgYn=N&strThisPage=1&strFilePath=i/mm/（アクセス：2012年9月20日）

夫も朝鮮族。長女は4歳、次女は7カ月。

金さんは中国の黒竜江省出身で、中国の大学では日本語を専攻した。2000年に留学で来日し、大学院に進学して修士の学位を取得した。その後、東京のある会社に就職したが、長女に次いで次女を出産することで会社を辞するようになった。夫は現在日本のIT関係の会社に勤めている。実父はすでに亡くなり、実母は約15年前に出嫁ぎにソウルに移動し、すでに韓国国籍を取得している。韓国には、中国から移動してきた親戚が約15名滞在している。金さんは実母と義母（夫の母親）ともに韓国に滞在していることから、定期的に子どもを連れて韓国に行く。2011年に日本で東北大地震があった時にも、金さんは子どもたちの安全を考慮して二人の子どもを連れて韓国の実母の家に行き、そこで約3か月滞在した。金さんの妹は中国で暮らしているため、金さんは妹に会うために中国に帰ることもある。将来、家族でどこで定住するかに関して、金さんはまだはっきり決めていないが、日本を離れる場合には、中国あるいは韓国に移動する予定だという。その中でも、金さんは「韓国と比べると、中国の生活にもっと慣れるが、韓国には母親がいるため、韓国へ移動する可能性が高い」と語る。

このように、金さんの四大家族は日本で暮らしているが、妹は中国に居住し、実母と義母および親戚の多くは韓国に滞在している。すなわち、金さんの家族と親戚の人びとは日中韓3国にそれぞれ滞在しているのである。そして、金さんは実母と妹および親戚の人びとと会うために中国だけでなく、韓国へ移動することも多い。特に、二人の子どもの母親である金さんは、実母がいる韓国に「里帰り」することが多くなる。日本を離れて再移動を行う際にも、金さんが中国より韓国を優先的に考えるのは、韓国が彼女にとって生まれ育った場所でもなくとも、実母がいることで安らぎを感じさせるために、一つの「帰る場所」となっているからである。

近年、中国における朝鮮族の子女の中にも両親が韓国で長期滞在する場合には、彼らの韓国への入国と現地での短期滞在が比較的に容易になっている。しかし、中国や韓国の人びとが日本へ移動する場合には、ビザの制限が厳しく、親戚訪問や観光としての短期滞在が容易ではない。この点では、日本在住の朝鮮族の日中韓3国の間の移動が比較的に容易に行われている。

以上見てきたように、高学歴朝鮮族の日中韓3国における移動には主に、この3国の言語が駆使できること、より良い高等教育とより良い仕事の環境を求めていること、そして両親の滞在地を一つの「帰る場所」とするなどの要因が含まれることが明らかになった。日本の朝鮮族にとって、日中韓3国はすでに国境を越えた一つの生活圏になっている。

III. 高学歴朝鮮族の子どもへの言語教育戦略

日本在住の朝鮮族女性の中には、日本で出産と子育てを経験する人が多い。その子どもたちは日本で育つ中で、日本の保育施設や教育機関（幼稚園、小学校、中学校など）に通うことが一般的である。けれども、特に高学歴朝鮮族の親たちは単に子どもを日本の保育施設や教育機関の教育に頼るだけでなく、家庭内における教育も積極的に行っている。彼らは家庭教育の中でも言語教育を重視し、家庭によって子どもに一つの言語を教える場合もあれば、複数の言語を同時に教える場合もある。しかし、それらの家庭に共通に見られるのはそれぞれの家庭内で複数の言語が使用されていても、主には一つの言語の教育に専念していることである。本稿ではその代表的なものとして、中国語を重視する家庭、朝鮮語／韓国語を重視する家庭、日本語

を重視する家庭の事例を取り上げる。

なお、本稿で用いる「中国語」は、中国で一般的に「漢語」と呼ばれる中国の国家標準語を指し、「朝鮮語」は、主に中国において少数民族としての朝鮮族が使用してきた「民族語」を指す。朝鮮族が使用する朝鮮語を北朝鮮の言語と区別するために、北朝鮮の国語は「北朝鮮語」と称する。「韓国語」は主に韓国の国家言語であり、ソウル語を中心とする標準語を指す。1990年代以降、朝鮮族の韓国への移動と彼らの韓国人と接する機会の増加および韓国のテレビドラマや音楽などのポピュラーカルチャーの影響の中で、朝鮮族がこれまで使用してきた朝鮮語は徐々に変化している。すなわち、韓国語の影響を受けることで、語彙やアクセントおよび言葉の表現などにおいて朝鮮語の「韓国語化」が進行している。したがって、朝鮮族の人びとの中では朝鮮語と韓国語の区別があいまいになっている。こうした現象に基づいて、本稿では朝鮮語と韓国語の両方を含めて、「朝鮮語／韓国語」という表記を用いる。

以下では、五つの家庭の事例を通じて、それぞれの家庭内における言語使用状況と言語教育の実態を明らかにする。

1. 中国語を重視する家庭

近年の中国経済の著しい発展とともに、世界各地からさまざまな機会を求めて中国を訪れる企業や人びとが急速に増加している。その流れの中で、中国語の国際的な市場価値も高まり、国際移動を行なう朝鮮族の中にも、次世代の中国語の習得を重視する人が増えつつある。日本在住の朝鮮族の場合には、子どもの中国語教育を家庭教育の中に取り組みることが多く見られる。

以下では、夫婦とも朝鮮族である二つの家庭と妻は朝鮮族で夫は日本人である一つの家庭の事例を見てみよう。

＜事例4＞ 李明華（仮名）、女性、30代、主婦、中国で学士号、日本で修士号取得。夫も朝鮮族。長女3歳、長男4か月。

日本の永住権を取得したのですが、中国には私と夫の両方の親と親戚がいるので、いつか帰る可能性もあります。だから、子どもたちも中国人として、中国語が分かなければならないと思います。そして、何より私は朝鮮語より中国語にもっと慣れているので、子どもたちにも中国語で話しかける場合が多いです。夫は朝鮮語を使うのが好きなので、普段夫との間では中国語と朝鮮語を混ぜて話す場合が多いです。娘は保育園に通っているため普段日本語を使うことが多いですが、できれば家の中では中国語を話すようにしています。朝鮮語は子どもたちが祖父母とコミュニケーションをとるために必要な言語だと思いますが、私と夫の間では朝鮮語を使うことも多いので、子どもたちが自然に覚えていくのではないかと思います。小学校に入る頃からまた英語も学ばなければならないので、子どもたちにあまり負担をかけたくありません。朝鮮語や韓国語と比べて、中国語がもっとも学びにくいと思いますので、子どもたちに小さい時から少しずつ中国語を覚えさせたいです。（2010年7月12日、東京にてインタビュー）

李さんが子どもたちに中国語を教えようとするには主に三つの理由がある。一つ目は、李さんにとって中国語が一番使い慣れている言語であり、二つ目は中国に帰る可能性を考えているからである。そして、三つ目は子どもたちに中国語を学ばせることで「中国人」という国民的帰属意識を獲得させようとするからである。したがって、日本の学校教育では習得しにくい中国語を家庭教育で補おうとしている。そして、李さんは自分の言語習得経験から中国語は

短期に容易に習得できる言語ではないと判断しているため、子どもが小さい時から少しずつ習得していくように指導している。ほかに、李さんの言語教育には選択的な戦略も見られる。すなわち、家庭内で中国語の使用と教育を重視するが、朝鮮語の教育には力を特に入れていないと言えよう。李さんは子どもたちが朝鮮語を主に使用する祖父母とコミュニケーションをとるためには朝鮮語を学ぶことが望ましいが、子どもたちが複数の言語を同時に習得することには大きな負担があると判断し、朝鮮語は夫婦の間で用いることによって、子どもたちが自ら習得していくことを期待している。

＜事例5＞ 張仁哲（仮名）、男性、40代、会社員、中国で学士号と修士号取得、日本で博士号取得。妻も朝鮮族。長女12歳、次女9歳。

私と妻の間ではいつも中国語を使います。娘たちは日本の学校に通うので日本語がもっと上手ですが、中国語も覚えてほしいから、家ではできれば中国語を使うようにしています。でも、家庭内だけでは中国語がちゃんと学べないので、娘たちを家の近くの中国語学院に通わせています。それまで娘たちは中国語をある程度聞き取れましたが、ほとんど話せなかったです。中国語学院に通い始めてからは、中国語をよく聞き取れるし、ある程度話すこともできるようになりました。娘たちが中国の祖父母と中国語で電話するのを楽しんでいるのを見て、とても嬉しいです。韓国語は、昔私が子どもたちに教えようと思って、韓国の友人から教科書を送ってもらったことがありますが、仕事が忙しかったので教える暇がなかったです。妻は朝鮮語や韓国語ができないので、諦めました。私は中国で朝鮮語を習ったのですが、あまり使えなかったのではほとんど忘れしました。子どもたちも将来たぶん朝鮮語や韓国語より中国語をもっと使うことになるのではないかと思います。（2010年9月4日、東京にてインタビュー）

日本国籍を取得した張さんの場合には、子どもたちに中国語を学ばせるのが必ずしも中国に移動させるためではない。彼は中国語が中国の両親や親戚の人びととコミュニケーションを行うための重要な道具であることと、子どもたちが将来中国語を用いて諸活動を行う可能性を考えたことから、子どもたちに中国語を習得させようとしている。そして、中国語は張さんが妻との間で一番多く使われる言語であることから、家庭内においても共通言語になっている。朝鮮語／韓国語は妻が駆使できないため、家庭教育にも取り入れることができなかった。こうした家庭内の言語使用状況から、夫婦の間で共有できる言語が子どもに再生産される可能性も高いと考えられる。しかし、家庭内の言語環境だけでは言語教育の効果が顕著でないことを意識した張さんは、語学学校という学校外教育も利用することで言語教育の目標を達成しようとしている。

＜事例6＞ 姜雪（仮名）、女性、30代、会社員、日本で学士号取得、カナダに1年留学。夫は日本人。長女4歳。

夫との間では基本的に日本語を使います。夫は日本人ですが、昔中国で中国語を少し習ったことがあるので、たまに中国語も使います。特に私の母親が中国から日本に来る時は、夫はいつも中国語で私の母親とコミュニケーションを行います。娘は保育園に入るまでは、中国語と韓国語（祖母との間では韓国語をよく使う）をよく使いました。しかし、保育園に入ってから日本語がちゃんと聞き取れなかったの、それ以降は家でほとんど日本語を使っています。最近、私がまた娘に簡単な中国語を教

え始めています。娘が小学校に入る前に、中国の実家に送って中国語をもっと学ばせようかと考えています。夫も娘が中国語を学ぶのをとても賛成しています。私が中国人だし、実家も中国にあるから、子どもが中国語が学べるこの環境をちゃんと生かさなければもったいないと思います。子どもが中学校に入ってから、カナダに留学させることも考えています。(2012年9月10日、東京にてインタビュー)

夫が日本人で、すでに日本国籍を取得した姜さんは、家庭内では日本語を使うことが多いが、場合によって中国語も使っている。中国語を少し学んだことがある夫も子どもが中国語を学ぶことに賛成しているため、姜さんは家庭内で子どもに少しずつ中国語を教えるように努力している。さらに姜さんは、自分が中国語という言語資本を持っていることと、中国にある親族のネットワークを活用することで、積極的に子どもに自分の言語資本を継承させようとする。

ほかにも日本人男性と結婚した朝鮮族女性の中には、夫との間では日本語のみ使用していても、子どもには中国語を習得させるために、夏休みや冬休みに中国にいる兄弟の家に子どもを送って短期留学させる現象も見られる。韓国の場合にも、韓国人男性と結婚した朝鮮族女性の中には、子どもに中国語を学ばせるために、中国の東北部にある実家に子どもを送り、現地の朝鮮族学校に約1年間留学させる現象が現れている。こうした家庭内では自分の持っている言語資本を生かすにいが、国境を越えた親族のネットワークを活用することでその言語を子どもに習得させようとするのが、近年移動する朝鮮族の中で増えつつある。

上記の三つの事例とも、親は「中国語は教育投資に値する言語である」と認識しているため、家庭教育だけでなく、語学学校の教育および中国への短期留学などのさまざまな方法を用いて、子どもに中国語を習得させようとしている。

2. 朝鮮語／韓国語を重視する家庭

日本在住の朝鮮族の中には、朝鮮語を「朝鮮族」と定義する際の重要な基準として認識する者が少なくない。特に夫婦とも朝鮮族で、二人の間で朝鮮語／韓国語を用いることが多い場合、「朝鮮族だから、子どもも朝鮮語を学ばなければならない」という考えから子どもに朝鮮語／韓国語を習得させようとする傾向がある。さらに、近年朝鮮族の韓国への移動の増加および中国と韓国との経済的文化的な交流が増える中で、朝鮮族の人びとは朝鮮語／韓国語をエスニック・アイデンティティを維持するための言語として考えるだけでなく、就職にも有利な一つの言語として認識することもある。

グローバル化の進展は、ヒトや物、カネだけでなく、国境を越える情報の伝達を加速化させている。今日、すでに国際移動を行わなくても、海外の情報を容易に獲得することができる。日本在住の朝鮮族の人びとは、インターネットを通じて中国だけでなく、韓国の音楽や映画、テレビドラマなどのポピュラーカルチャーを日常的に接している。一部の朝鮮族女性にとって、韓国ドラマを観ることがすでに彼女たちの日常生活の欠かせないものになっている。韓国ドラマを通じて、朝鮮族の女性たちは韓国の言語やライフスタイルおよび韓国人の人びとの価値観への理解を深めている。ある朝鮮族女性から「韓国ドラマをよく観るけど、韓国語の表現が面白い」という声も聞かれた。この「韓国語の表現が面白い」という言葉は、韓国語の語彙の豊かさとその言語がもたらす親近感を指すものである。

以下では、家庭教育において朝鮮語／韓国語の使用を重視する二つの家庭の事例を見てみよう。

＜事例7＞ 全鳳花（仮名）、30代、朝鮮族、日本で学士号を取得、会社員。夫も朝鮮族。長女4歳。

私は家で夫とは韓国語をよく使いますが、子どもとは日本語を使うことが多くなります。テレビで流されているのも日本語だし、保育園で使うのも全部日本語なので、子どもは当然日本語を一番多く使うようになります。けれども、できれば家では子どもにも韓国語を使うようにしています。私の両親は、娘が生まれた時から毎年日本にきて約半年滞在するので、そのおかげで娘が祖父母から韓国語をたくさん学ぶことができました。夫の両親は数年前からずっと韓国に住んでいるので、毎年のお正月には私が生子どもを連れて韓国に行きます。娘は今韓国語があまり話せないですが、結構聞き取れます。韓国語で話しかけると、何を言っているのか分かっていうようで、すぐ日本語で返事してくれます。うちはいつか中国に帰るつもりなので、中国語は帰国してから学んでも大丈夫だと思います。今はせっかく日本にいるから、日本語も覚えてほしいし、朝鮮族だから韓国語もできないとだめだと思います。中国に帰ると、韓国語は一つの外国語にもなるので、学んでおいたほうが子どもが大きくなった時にきっと役に立つと思います。（2010年11月30日、東京にてインタビュー）

全さんの子どもは日本の保育園に通っているため、ほとんど日本語しか話せないが、全さんは家庭教育を通じて子どもに韓国語を習得させようとしている。それは、韓国語が家族三世代の間でコミュニケーションを行うための一番重要な言語であるだけでなく、「朝鮮族」としてのエスニック・アイデンティティを獲得するための手段でもあり、さらに一つの外国語として子どもの将来の就職にも役立つと考えているからである。特に、全さんの「朝鮮族だから韓国語もできないとだめだ」という言葉には、朝鮮族のエスニック言語を失うことは「朝鮮族」でなくなるという意味が含まれている。自分の親の世代が朝鮮語を維持してきたように、全さんは自分の子どもにもその言語を維持・継承させようとしている。それは、渡辺が指摘したように「民族固有の文化や世界観を次世代に伝達し、次世代がそれを継承していくためには、それが反映されている言語が必須である。いわば、いわゆる（他の言語に）翻訳不可能な部分こそ、その文化の特質であると言えるかもしれない」（2004: 134）という考えによることだろう。

全さんは、中国語は中国に帰った後でも十分な言語環境が与えられると考えているため、日本にいる間は中国語の教育を行っていない。日本語は現在日本に住んでいると同時に、子どもが日本の保育園に通うために必要な言語であるが、将来に活用できるもう一つの外国語としても考えているため、家庭内で子どもと日本語を用いることが多い。全さんは、中国語と日本語は居住国の言語であるため、社会的な言語環境が十分だと考えるが、韓国語は韓国に住まない限り子どもが自然に習得できる環境が不十分であることを意識し、積極的に家庭教育に取り入れようとしている。

＜事例8＞ 申明愛（仮名）、30代、朝鮮族、会社員、中国で学士号取得、日本で専門学校卒業。夫は韓国人。長男3歳。

夫は韓国人で、私も母語は朝鮮語（主に中国にいた時に使っていた朝鮮語を指す）なので、夫との間では韓国語を使うほうが便利です。子どもも韓国語ができなければならないと思うので、保育園では日本語を使い、家では韓国語を使うようにしています。夫は息子を韓国人として育てたいから、小学校に入学する時には韓国の学校に通わせたいと言っています。私の実父母や義母、そして親戚の多くも韓国に住んでいるので、

私も韓国で暮らしたいと思います。夫は子どもが中国語も学んでほしいと言っていますが、家で私一人だけが中国語を使うのはなかなか難しいです。私は、むしろ子どもに中国語より世界的に通用する英語を学ばせたいです。今年の初めからベネッセの英語教材を使っていますが、子どもがDVDを見て少しずつ覚えています。でも、家で主に使うのはやはり韓国語です。(2012年9月2日、東京にてインタビュー)

申さんが家庭内で韓国語を主に使うのは、夫婦との間で一番多く使われるのが韓国語であると同時に、子どもにも習得させたいからである。申さんの三人家族は現在日本で生活しているが、将来韓国に帰ることを予定し、子どもが小学校に入学する際には韓国の学校に入れようとする。子どもに韓国の学校教育を受けさせたいという考えには、申さんの夫が子どもを「韓国人」として育てたいという意識が強いことによる。したがって、申さんの家庭は事例7の全さんの家庭と異なり、韓国へ移動するための準備として家庭内で韓国語の教育を行っている。そして、申さんは日本語は日本で暮らすために必要な言語であり、子どもが日本の保育園に通うために習得しなければならない言語として考えているが、必ずしもそれを一つの言語資本として蓄積しようとする意識はあまり見られない。そして夫は申さんが中国語が駆使できることから子どもにも中国語を教えることを希望するが、申さんはむしろ世界的に使用範囲が広く、自分は十分習得できなかった英語により投資する価値があると考え、子どもに英語を習得させようとしている。

上記の事例7と事例8の共通点は、韓国語の教育を行う原因の一つが、子どもに「朝鮮族」あるいは「韓国人」というアイデンティティを獲得させることである。けれども、両者の異なる点は、全さんは日本や中国（東北部の朝鮮族学校以外の教育機関）の学校教育では保障できない朝鮮語／韓国語を家庭教育によって補おうとする一方、申さんは子どもを韓国の学校に通わせるためにその準備の一環として家庭内で韓国語の教育を行うことである。

3. 日本語を重視する家庭

日本在住の朝鮮族は、まず日本で生活するためには日本語を習得することが必要になる。本稿で取り上げた朝鮮族はほとんど中国の中等教育で日本語を外国語として習得し、さらに日本の高等教育機関で教育を受けたため、日常生活における日本語の使用には特に困難を感じない。そのため、彼らは日本語を学び始める自分の子どもへの指導もできる。彼らは子どもが保育園や幼稚園に通う前から、日本語を教え始めることが多い。けれども、子どもが保育園で保育士やほかの子どもたちとのコミュニケーションがある程度できるようになると、すでに述べたように家庭内で中国語や朝鮮語／韓国語を教えることが少なくなる。しかし、下記のように家庭内でずっと子どもと日本語のみ使用する場合もある。

＜事例9＞ 徐英実（仮名）、女性、30代、中国で学士号、日本で修士号取得、現在博士後期課程在籍。夫も朝鮮族。長男4歳。

私は、子どもがまず一つの言語をちゃんと学んでほしいです。今は日本に住んでいるから、日本語をしっかり学べばそれでいいと思います。家で私は夫との間では朝鮮語と中国語そして日本語の三つの言語を混ぜて使う場合が多いですが、息子とはほとんど日本語のみ使います。息子は朝鮮語が少し聞き取れますが、あまり話せません。私の母親や姉妹そして親戚の多くは普段朝鮮語／韓国語を使いますので、息子もある程度学べると 생각합니다。将来中国に帰る予定なので、中国語は中国に帰ってから学ん

でも間に合うと思います。中国で暮らすためには、中国語をちゃんと学ばなければならないと思うので、子どもが小学校に入る時は中国の漢族学校に通わせるつもりです。私が日本のことが好きだからかもしれませんが、息子が日本に在る間に日本語をちゃんと学んでほしいし、中国に帰っても忘れないでほしいです。将来息子が中国の学校に通っても、夏休みとかに日本に来てもっと日本語を学んだり、日本社会を体験できるようにしてあげたいです。(2011年12月18日、名古屋にてインタビュー)

中国に帰ることを予定している徐さんは、日本で子育てする間に子どもに中国語を教えるのではなく、日本語の習得に専念させている。そのために、子どもに保育園で日本語を学ばせるだけでなく、家でもその言語を続けて使用できるように積極的に言語環境を作っている。徐さんは居住国の言語に熟達する必要性を認識し、日本に在る間には子どもに日本語を習得させている。それは中国に帰ると、日本語に接する環境が限られているため、日本に在る時の社会的な言語環境を最大限に生かしたいという考えによる。けれども、徐さんが子どもに日本語の習得を重視することは、単にそれを一つの言語資本として蓄積するという考えに限るものではない。徐さんは「日本人の仕事に真摯に取り組む姿勢や人への思いやりなどに魅力を感じる。息子にも是非そういった面を見習ってほしい」という考えから、子どもに日本語を学び日本人と接することで、日本人のそういった文化的な側面も自然に受け入れていくことを目指している。そのため、将来中国に帰っても子どもが日本や日本人の人びとに関する理解を深めるために情報収集をしたり、さらに日本へ移動したりするためには日本語を習得する必要があると徐さんは強く意識している。

以上、家庭教育においてそれぞれ中国語、朝鮮語／韓国語、日本語を重視する五つの家庭の事例を見てきた。これらの事例から、日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは子どもの教育において主に三つの言語を考えていることが明らかになった。すなわち、居住国の言語、家族の間でコミュニケーションをとるための言語あるいは「朝鮮族」や「中国人」という帰属意識を獲得させるための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語などである。そして、彼らはそれぞれの言語を子どもに習得させるために、学校教育と語学学校のような学校外教育および家庭教育といったさまざまな教育の方法を用いて、それぞれの教育の目標を達成しようとしている。

しかし、その中でも高学歴朝鮮族の親たちは特に家庭教育を重視し、自ら持っている言語文化資本を家庭の中での教育を通じて積極的に次世代に継承させようとしている。朝鮮族の親たちが家庭内において言語教育戦略を行うことができることには、彼ら自身が三言語あるいは四言語の言語資本を有すると同時に高等教育を受けたことが不可欠である。複数の言語を身につけることによって、居住国での適応やさらなる移動の準備そして家族や親戚との繋がりおよびエスニック・アイデンティティの維持といった拮抗する諸要素のバランスを保つことが、移動する高学歴朝鮮族の生き方であり、彼らの次世代への教育の臨み方でもある。このように、日本在住の高学歴朝鮮族の家庭内の言語使用と言語資本の再生産は、彼らのはっきりとした目標と子どもの受容に合わせて計画的および戦略的に行なわれている。

IV. ハイブリッド・アイデンティティの構築

日本在住の朝鮮族は、一般的に日本の人びとから「中国人」と呼ばれている。それに対して、

朝鮮族の人びとも一般的に「中国人」と自称する。彼らの「朝鮮族」としてのエスニックな部分は、日本社会であまり知られていないと同時に、あまり問われないものである。それは主に、朝鮮族の人びとの自己主張によって周りの人びとに知られる場合もあれば、単に朝鮮族のエスニック・グループの中で維持される場合もある。朝鮮族の中で「日本人の方に自分が朝鮮族であることを説明しても、相手がよく分からないし、関心もないようだ」という発言がよく聞かれる。こうした「朝鮮族」というエスニックな部分が日本社会で明確にカテゴリー化されていないことが、むしろ朝鮮族の人びとに自分たちのアイデンティティを自由に表現する空間を与えていると考えられる。

グローバル化の進展とともに人の国際移動が急速に増加する今日、移動する人びとの帰属意識も多様に変化している。平野は「現代の重層的な国際社会のなかでは、個人は異なる次元上の複数の集団に、意識の強度に違いはあっても、同時に帰属することを意識する。今日の国際社会のなかで、個人のアイデンティティは複合的な性格を帯びようになっているのである」(2000 = 2001: 193)と述べ、個人の複合的なアイデンティティについて指摘した。そして、Schumannは、トルコ系ドイツ人の事例を取り上げ、彼らの中で行われるドイツ文化を受容するのか、それとも自分たちのエスニック文化を維持するのかという両者の間の絶え間ない交渉は、一種の特別なアイデンティティを創造する(2011: 2)と主張し、そうしたアイデンティティを「Hybrid Identity」(ハイブリッド・アイデンティティ)と称した。

本稿で取り上げた朝鮮族の中でも、国際移動によってアイデンティティが多様に変化していることが見られる。彼らの中には、移動によって「中国人」意識や「朝鮮族」意識が強くなる場合もあるが、新しい現象としては自分の属する国籍にこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体にも強い帰属意識をもつことが見られた。朝鮮族のこうした新しいアイデンティティの構築は、主に文化的な要素による自己規定である。本稿では、個々人の内面における複数の文化の交渉あるいは統合による新しいアイデンティティの創造に注目することで、「ハイブリッド・アイデンティティ」という語を用いる。

それでは、以下では具体的な事例を通じて移動する朝鮮族のハイブリッド・アイデンティティの構築について検討する。まず30代前半に日本に留学し、すでに日本国籍を取得した林さんの事例を見てみよう。

＜事例10＞ 林晋洙(仮名)、50代前半、中国で学士号、日本で修士号と博士号を取得、専門職。

最初に日本に来た時に、日本人の方から「あなたは何人ですか」と聞かれましたが、当時はとても答えにくかったです。私は、自分が中国から来たが「朝鮮族です」と答えると、彼らは理解できないようでした。それを説明するのも、とても難しかったです。その後、また息子との対話もあったのですが、息子は日本で生まれ育ったので、私が中国から来た朝鮮族と言っても、彼はなかなか理解できなかったようです。そうした理解をしてもらえないことで、私は一体自分が何者だろうという葛藤を経験しました。それで、考えた末に、それも日本に来てから約10年経った後ですが、自分のことを「東北アジア人」と自称することにしました。それは、近年私が東北アジアのさまざまな国(主に中国、韓国、北朝鮮、日本、ロシア、モンゴルなど)や地域を訪問することが多かったのですが、それらの国の言語もある程度できるし、それらの国の人びとも仲良くしてきているので、そうした地域にも親しみを感じているからです。これで、私のアイデンティティの問題は解決できたと思います。それに対して、息子も納得で

きたようです。(2011年12月17日、京都にてインタビュー)

林さんは仕事による海外出張が多いが、中国の国籍であることと海外への移動の際にビザの申請の手続きが複雑であるため、出張の日程に合わない場合が多いことから、6年前に日本国籍を取得した。林さんは自分が国籍を変えたのは、国際移動が自由にできることが目的であるため、名前は昔のままだという。そして、林さんは多様な国へ移動する中で、すでに「朝鮮族」という言葉だけでは自己規定できなくなったことに気づいた。彼が上記の東北アジアのそれぞれの国や地域に帰属意識をもつことになったのは、来日してから約10年経った後のことであり、それまではさまざまな呼び名で自称したりしていた。けれども、林さんが自称する「東北アジア人」という言葉には、「中国人でもあり、朝鮮半島（韓国と北朝鮮両方を含む）の人でもあり、日本人でもあり、モンゴル人でもある」ことを意味すると同時に、その反対である「中国人でもなく、朝鮮半島の人でもなく、日本人でもなく、モンゴル人でもない」ことも意味すると語る。それは、林さんの中にある多様な言語や文化がそれぞれ彼の一部であると考える時には、そうした言語や文化が各自創造される地域やそこにおける人びとと一定の共通点があると言えるが、単に一つの地域に時間的および空間的に深く関わることを基準として規定する場合には、彼をどの国や地域の人としても定義できないということである。

ベネディクト・アンダーソンは、「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である—そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なもの〔最高の意志決定主体〕として想像される」(2007: 24)と定義している。こうした「国民」概念は、主に国籍の属する国に限定することを指し、近代社会において正当性をもっていた。したがって、このような国民概念では林さんの「中国人でもあり、韓国人や北朝鮮人でもあり、日本人でもある」という定義は成立しにくいのである。平野も指摘したように「近代においては、個人が帰属意識をもつべき集団は、国民あるいは国民国家に限定された。(中略)平面的な構造の国際社会のなかでは、個人が国家Aに帰属するということは、同時にそれ以外のどの国家にも帰属できないということに等しかった。Aの国民であることが個人の人格そのものでさえもあつた」(2000=2001: 193)。グローバル化時代における人びとの国際移動が日常化しつつある今日、人びとのライフスタイルも大きく変化している。すでに複数の国や地域において人生のそれぞれの時期を過ごす人びとが増えている中で、従来の国民概念では彼らの帰属を規定することに限界があるだろう。

したがって、移動する朝鮮族の人びとは国籍や出身のエスニック・グループに拘らずに、文化的な側面から自分の帰属を規定し、新しい自分を表現しようとしている。白石は「共同体は、その成員となる人々によって「我々」という一体性をもつ集合体として想像されることで成立する。それは人々の文化的アイデンティティの問題である。すなわち、一人ひとりの成員が、自己の帰属に関する時間的・空間的な意味の創造／想像を行い、あるいは、創造／想像された時間空間を自己のものとして受容することである」(2007: 203)と指摘している。上記の林さんは、複数の国や地域の人びとと言語・文化的に相互に認識し、相互に受け入れることで「われわれ」意識を持つことになった。そして、彼はそうした複数の国や地域を一つの空間的な共同体として想像することで、その共同体に帰属意識をもつことができた。

このほかにも、国際移動を行う朝鮮族の若者の中には、国民的帰属意識に加えて日常において本人と密接な関係にある企業といった集団に対する帰属意識をも新たに獲得する事例が見られる。以下では、中国でアメリカ資本の企業に就職した後、日本に派遣され、日本と中国の間を行き来する朝鮮族の若者の帰属意識の変化について見てみよう。

＜事例11＞ 徐基峰（仮名）、男性、20代、朝鮮族、中国で学士号を取得、アメリカ資本の企業の社員、日本に転勤。

私は自分の「中国人」としての国民意識が薄くなっていると思います。それに代わってきたのは、会社への帰属意識と自己認識です。今の私にとって最大の利益集団は会社であり、私のほとんどの社会活動は会社の環境を通じて表すことになります。それに個々人の競争力が最も重要になっています。中国にいた時は、常に国家情勢によく関心を寄せていたし、自分のやっていることを常に国家の発展につなげて考えていました。しかし、企業に勤めてからは企業意識がだんだん強くなり、自分と企業との関連性にだんだん気づくようになりました。特に多国籍企業は利益を創出することが前提になりますが、多様な考え方や価値観が受け入れられることもあるため、そうした環境がますます好きになってきました。（2010年2月13日、東京にてインタビュー）

徐さんは中国で暮らしていた時は、中国国民として「中国人」意識が強く、常に自分を国と関連づけて考えることが多かったが、企業に勤めてからは国より企業への帰属意識を強く持つようになった。そして、特にアメリカ資本の企業に勤め、さらに日本に転勤することで徐さんのそうした変化はより顕著に現れている。中国で生まれ育ち、朝鮮族学校に通うことで中国語と朝鮮語、そして日本語を習得し、その後英語も独学した徐さんは、多様な考え方が受け入れられる多国籍企業の中で自分の居場所を感じるようになる。それは、彼が自分の中にある多様な文化的な要素による価値観や考え方がそうした企業において受容されることで、それまで維持してきた多様な言語的文化的な要素を肯定的にとらえることができたと同時に、それらを引き続き維持することもできるからであろう。このような企業といった集団の中で感じた居心地良さは、徐さんの企業に対する強い帰属意識を持たせた。

このように、林さんと徐さんは国際移動の中で自分の中にある複数の言語や文化に気づくことで、彼らのアイデンティティは大きく変化している。彼らは移動の中で自分が誰なのかを考えるようになり、したがって主体的に自分を表現するようになった。国民国家の枠組みを超え、政治的および歴史的な枠組みを超えた一種のハイブリッドな文化的アイデンティティが高学歴朝鮮族の中で創出されている。

V. むすび

本稿では日本在住の高学歴朝鮮族の日中韓3国における移動の実態と彼らの言語教育戦略、そして高学歴朝鮮族のハイブリッド・アイデンティティの構築について考察した。

朝鮮族の多くが中国の朝鮮族学校において中国語と朝鮮語および外国語として日本語を習得したことが、彼らの東アジアの域内における移動を活発化させている。特に、高学歴朝鮮族の若い人たちは、より良い教育やより良い仕事の環境を求めて、日中韓3国の間で移動している。その中でも、韓国は朝鮮族にとって先祖の生まれた地としての「故国」であると同時に、若い朝鮮族の場合には両親や親戚の多くが中国から韓国に移動し、さらに韓国で長期滞在しているため、彼らにとって韓国は中国に加えてもう一つの「帰る場所」となっている。特に、国際移動が比較的容易である日本在住の朝鮮族にとって、日中韓3国はすでに国境を越えた一つの生活圏になっている。

朝鮮族の多くとは国際移動の中で、自分は誰なのか、どんな言語を学ばなければならないの

かを意識するようになり、さらに子どもの言語習得やアイデンティティの獲得についても考えるようになった。日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは子どもへの言語教育を重視し、一般的に三つの言語を考えている。すなわち、居住国の言語、家族の間でコミュニケーションを行うための言語あるいは「朝鮮族」や「中国人」という帰属意識を獲得するための言語、そして今後の移動や子どもの将来の就職に有利な言語などである。高学歴朝鮮族の人びとは、こうした三つの言語を学校教育だけでなく、家庭教育や塾といった学校外教育を通じて、子どもにそれぞれ習得させようとしている。

日本在住の高学歴朝鮮族の人びとは特に家庭教育を重視し、学校では習得しにくい中国語や朝鮮語／韓国語を家庭教育によって子どもに習得させようとしている。中国に帰ることを予定する家庭では中国の学校では習得しにくい日本語の教育を重視する場合も見られた。こうした言語教育戦略を行う朝鮮族の親たちは、三言語あるいは四言語の言語資本を有し、出身国や移動先の国で高等教育を受けたという特徴がある。すなわち、彼らには子どもの言語教育において投資するに値する知識がある。高学歴朝鮮族の人びとは、国際移動の中で自分たちの言語資本に目覚め、長期的な視野から子どもたちが激しい競争社会の中で生き残るための一種の生きる力として、自分たちの言語資本を戦略的に次世代へ再生産しようとしている。

また、今回の調査から、高学歴朝鮮族自身がハイブリッド・アイデンティティを獲得していることが明らかになった。日本在住の高学歴朝鮮族の中には、ダイナミックな国際移動の中で、すでに国籍や出身のエスニック・グループにこだわらず、複数の国や地域およびそれとは異なる次元の共同体に同時に帰属意識を持つ現象が現れている。彼らは国際移動の中で主体的な考えをもつようになり、言語的文化的な側面から自分を規定することで、政治的および歴史的な枠組みを超えたハイブリッドな文化的アイデンティティを創造している。このような彼らは、子どもにも多様な柔軟なアイデンティティの構築を目指していると考えられる。戦略的な言語教育はそのための手段でもあるだろう。

参考文献

<日本語文献>

- アベラ、マノロ 2009年 「東アジアにおける専門職労働移動」、『アジア研ワールド・トレンド』No.164、14-15頁。
- アンダーソン、ベネディクト 2007年 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳）、東京：書籍工房早山。
- 白石さや 2007年 「ポピュラーカルチャーと東アジア」、西川潤・平野健一郎編 『東アジア共同体の構築3 国際移動と社会変容』、東京：岩波書店、203-226頁。
- 趙貴花 2008年 「グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容：中国朝鮮族の事例」、『東京大学大学院教育学研究科紀要2007』第47巻、177-187頁。
- 坪井健 2007年 「在日中国人留学生の動向」、飯田哲也・坪井健共編 『現代中国の生活変動』、東京：時潮社、151-177頁。
- 平野健一郎 2000＝2001年 『国際文化論』、東京：東京大学出版会。
- 渡辺己 2004年 「北アメリカ北西海岸先住民にみる言語とアイデンティティ」、小野原信善・大原始子編著 『ことばとアイデンティティ——ことばの選択と使用を通してみる現代人の自分探し』、東京：三元社。

<外国語文献>

Schumann, Stefanie. 2011. *Hybrid Identity Formation of Migrants: A Case Study of Ethnic Turks in Germany*, München: GRIN Verlag GmbH.